

2023 年

本気で願う

人は飛ぶ生きものではないが本気で願った事に全力で挑戦した時、人は飛ぶ、高い空を飛ぶ！

「一隅^{ぐう}（かたすみ）を照らす」中村哲氏の言葉だ。

誰も手を差をさしのべようとせず、苦しみの中にいる人の幸せを願い生きる・と言う意味だ。

★医師のいないアフガニスタンの地に渡り、馬に医療品と食料を積み、山の中を診療してまわった。やがて、病の原因が干ばつの水不足によることがわかると、用水路の建設に挑んだ。全くの素人だ。誰もが無謀としか思わなかった。・だがその無謀に 35 年の歳月を注ぎ、荒れ果てた荒野を緑の大地にした！その成果は用水路だけではなかった。生きる望みを失っていた多くの村人の心に希望の灯を灯したのだ。

カメラマン鈴木賢二氏は 21 年間アフガニスタンに通い、中村氏を撮り続け

「武器より命の水を」 「荒野に希望の灯をともし」のドキュメンタリーを世に出し

本気で願った事に全力で挑戦した中村氏の姿を届けてくれた。

やさしくね。やさしくね。やさしいことは強いだよ 宮城まりこさんの言葉だ。

1960 年頃まだまだ国は福祉へ目も向けてない時、親に捨てられた子、親と死別しゆき場のない障害をもつ子ども達の為に私財を投じて「肢体不自由児の養護施設・ねむの木学園」を創った。41 才の時だった。その私財は早くに母親を亡くし、父親の事業の失敗から小学卒ですぐ吉本興業に入り懸命に得た資金だった。こうして生まれた「ねむの木学園」の子ども達は素晴らしい教育を受けることができた。

美しい音楽・美しい言葉・美しい絵・造形・景色・・・出会える限りの美しい世界に出会ってゆく。やがて、子ども達の魂の奥から泉のように、喜びに満ちた生きる力が溢れてきた。

子どもたちの歌声はアメリカのミュージカル劇場で響き渡り・・・生まれた絵はフランスの美術館に展示されるようになっていった。まりこさんは言った。「文化のない教育は魂を生みません」と。

41 才から 93 才まで、子どもたちの幸せを本気で願い全力で挑戦してきた 52 年間だった。

辛くて、辛くて何べんこの仕事をやめようと思ったか・・・けどな春になると

あっちからも、こっちからも草の芽が顔出してじーとこっちを見るのさ。

するとな、胸の奥からもやもやしたもんが出てきてな・・・希望ってやつだと思うよ。

そいつが言うのさ。「もう一年やってみろ」ってな。

山田洋次監督「遙かなる山の呼び声」より

弱くて 強くて不思議な母さん 悲しいときには泣かないで、嬉しい時に涙をこぼす

母さんそよ風 やなぎの小枝・・・くすくす笑いのこぬか雨・・・(サト-ハチロー)

両親が別々になり、家族を失った僕は「こういうのが家族だ」って叫びたくて「家族」を撮り続けた

山田洋次

「人生の明暗を笑いで包んで届けたい！最初から最後まで笑いどうしの作品を撮りたい！」

それを本気で願い、全力で挑戦してきた。そして 91 才の今も「人の情ってえのはこういうもんだ」とメガフォンを握っている。ヨーイスタート・ガチャン・・・

飛ぶ音が聞こえる。山田洋次監督が高い空を飛ぶ音が聞こえる！

以前に「平和を築こう」という集いが開かれた。その時、自由の森学園の高校生が言った。

「世の中を平和に、と言われることは、僕にとっては海の水を甘くしなければだめだ・と言われた様なとてつもない大きな事だ。僕に何ができるのか・考えたが、できる事はせいぜい小さなスプーンに一杯の砂糖を注ぎにゆくことぐらいだろう。 そんなことをしても何の変化も生じない。

けど・・できっこない 無理だと諦め何もしないこととは違う。

その時できる精一杯をしてゆけば、小さい事だけどきっと僕の生きる誇りとなると思う。

世界に広がる「巨大な教団」というとてつもない大きな海との闘いは筆舌に尽くせる事ではなかつたろう。だが 40 数年の歳月、その巨大なものと闘い続けた勇者（弁護士、ジャーナリスト他）達がいた。毎年毎年スプーンに一杯の砂糖を注ぐような日々だったことか・・・

けれども彼等は苦しんでいる人を一人でも救うことを本気で願い 全力で挑戦してきた。

そして今 その声が社会に響きはじめた。いよいよここから社会の人々と共の闘いになる。本気の声援とできうる限りの応援をしてゆこう！

声はうそはつかない。 目もうそはつけない。 ないものは出ない。 あるものが出る。

毎日の様にテレビに出る政治家達が、本気で国民の事を考えてくれているのか？いないのか・・

「考えていない」時は「考えていない」と言うことが声にも、目にもはっきりと現れる。

歳月もうそはつかない。本気で願い続けたのか否かは歳月が答えてくれる。

第二次世界大戦の最中の、オランダの母親達の言葉（下記）が時を超えて届いている。

私達は戦火の中でも、每晚必ず子供達に母国語で心楽しい話を届け続けます。

それが私達の大声での戦争反対の行為です。

今日本中の何人の大人がこのオランダの親の様に每晚、毎日子ども達に心楽しいお話を届けてくれているのだろうか？・・街頭で「子どもに話してあげる楽しいお話をご存じですか？」とマイクを向けたなら一体何人の人が「知ってるよ！」と和やかな表情で桃太郎や浦島の話以外の話をしてくれるだろうか？もしかすると絶滅危惧種同様になってしまうのではないだろうか？

日本中の保育士さんが、先生が、親が、どこにいる大人も・誰もが子ども達の喜ぶお話

手遊び・人形を届けてあげられる！その日を本気で願い、全力で挑戦してきて40年経った。

スプーン一杯ほどの小さなお話を、小さな小さな魔法の箒を作り続けてきた。

そして気がつく「お話し森」が少しづつあちこちに生まれている！

お話の魔法使いとなり空を飛び続けてきて本当に良かった！と思う・・・

だが本物の魔法使いは300年も400年も空を飛ぶが・人間の魔法使いは命の限りがある。

悲しい旅立ちをした子ども達が「楽しいお話」を待っている天国へ飛んでゆく日もそう遠くはない。

その日がくるまでに、一人でも多くの人に「楽しいお話」を届けてゆきたい！

そのことを本気で願い、今年も「おはなしかごの扉」を開けよう。

「お～い～ 楽しいお話！！ここにあるぞ～」 お話の魔法使いの学校の校長より

